

# 「なまけもの」

2023/5/28

雨森 れに

## 〈人物表〉

富田 和也	(38)	無職。元消防隊員。
富田 三奈	(34)	和也の妻。保育士。

## 〈ログライン〉

無職になってからソファから動かない元消防士の和也が、上階の火災により動き、それによりカビが生えてたことがわかり、今後動くことを約束させられる。

## 〈作者の狙い〉

- ・和也がどれだけ怠けているか
- ・何かを馬鹿にするときは我が身を振り返ること

マンションの一室。テレビの前に3人かけの白いソファとテーブル。よれよれの寝間着姿で数日風呂に入っていない状態の富田和也（38）がソファで横になり毛布にくるまってスマホを触っている。掃除機をかける富田三奈（34）が声をかける。

三奈 「ちよっとそこどいて」

和也 「うん」

和也、返事をするが動かない。ソファからはみ出た右足首ががわかったわかったというように上下に動く。

三奈 「聞いてる？ もう2ヶ月ぐらい、このあたりやれてないんだけど」

和也、三奈の顔を見てため息。ゆっくり起き上がるうとして、やめる。

和也 「だめだあ。動けない。あ、三奈、リモコン取って」

ソファの前にあるテーブルの中央にあるリモコンを指差す。

三奈、掃除機を止め、リモコンを取り、和也に差し出す。

和也、寝ころんだまま、笑顔でリモコンを受け取るうとする。

三奈はリモコンを渡さずに腕をひっこめる。

三奈 「で、いつどいてくれるの？」

和也 「えーっと、昨日の録画観たらかなあ」

三奈 「それがいつ終わるの？」

和也 「金ローだからすぐだよ。あ、そのまま再生してくれない？ 録画の一番上のやつ押してくれればいいから」

三奈、ため息。リモコンを操作する。テレビ画面には録画一覧が映る。一番上の録画時間は2時間。

三奈 「2時間」

和也 「な、すぐだろ。昼めしとおやつでも用意してればいいじゃん」

三奈、テレビの電源を消す。

和也、三奈を睨む。

和也 「なにすんだよ。観せろよ」

三奈 「別に食べるもの用意してもいいけど、2時間あつたら洗濯もできるから。服替えてきて」

和也 「だーかーらー 観たらやるから」

三奈 「風呂入れとはいってないじゃん。着替えてくるだけだよ」

和也 「まだ汚くないし」

三奈 「（和也の寝間着についているシミを指差しながら）ケチャップでしょ、ソースでしょ、これは油？ ほら、なんか加齢臭もするし。着替えて」

和也、無言。

三奈 「着替えたらまた横になっていいから」

和也 「じゃ、じゃあ」

和也、上体をあげる。

三奈 「はい、これ着替えね」

三奈、新しい下着と寝間着を渡そうとする。

和也 「自分でリモコンやるから、かして」

和也、手を伸ばす。

三奈、着替えを床にたたきつける。大声で、

三奈 「そうじゃないでしょ」

和也 「自分でやってほしかったんだろ。俺だってそういう気遣いできるから」

三奈 「2時間も待つならその間にできることあるから協力してっつてことでしょーー」

和也 「あー 2時間待ちたくないってことね。いいよ。じゃあダーウィンが来た！を見るからさ。それから30分だし」

三奈 「なーんでそんな考えになるかなあ。もういいわ」

三奈、リモコンを渡す。

和也 「ほら、三奈も観ろよ。今回はナマケモノなん  
だって」

三奈、画面を見て嫌そうに顔を歪める。

三奈 「うわ。カビみたいな色してるね」

和也 「カビなのかね。へえ、苔だって。全然動かない  
と動物にも苔はえるんだ。動物として終わってる  
なあ」

和也は寝たまま、三奈はその場で立ったままテレビ  
にくぎ付けになる。

マンションの火災報知器が鳴る。

和也、飛び起きる。ベランダに出て、外の様子を伺  
う。

3階上の2軒隣ほ部屋から黒い煙。

和也は確認できたというように頷き、急いで室内に  
戻る。

和也 「3階上だった。三奈は119番電話して。俺は  
行ってくる」

三奈、無言で数回頷く。

和也は寝間着のまま飛び出す。

三奈、ソファアが緑色になっているのを発見する。

× × ×

ススだらけの和也。リビングに入ってすぐにソ  
ファアに向かい、ドカッと座る。

和也 「つかれたあ」

三奈、駆けつけて、

三奈 「ちよつと。ソファア汚れちゃう……けどもう  
いっか。はあ。結局なんだったの？」

和也 「串揚げパーティーして出火したっほい。廊下に  
あった消火器であつという間に鎮火ってかんじ」

三奈 「大火事になったらどうしようって思ってたけど、  
全然そんな感じじゃなかったんだね」

和也 「まあ俺がいたし」

和也、嬉しそうに笑う。

三奈 「そうやって動いてるほうがいいと思うよ」

和也 「えっ俺はダラダラしたい」

三奈 「はいはい。とりあえずお風呂いってきて。さすがにそれは汚れてるでしょ」

和也、自分の体を見る。

和也 「たしかに」

2 富田家・脱衣所(夕)

風呂場には和也の影。

三奈は洗濯籠に入っている和也の寝間着の背中側を見る。うっすらと緑色になっている。

3 富田家・リビング(夕)

ソファーには着替え前の寝間着が背中側を見せるように置いてある。

風呂上がりの和也、タオルで頭を拭きながらソファーまで歩く。

三奈、和也の背後から現れる。

三奈 「ねえ」

和也 「ひっ びっくりしたあ」

三奈 「テレビの覚えてる？」

和也 「あ、ダーウィン続き観ようか」

三奈 「そうじゃなくて。それ見て」

三奈、ソファーを指差す。

和也、目を凝らしながら、

和也 「俺のパジャマ？ 背中、なんでこんな色になってんだろ」

三奈 「ソファーも同じになってるでしょ」

和也 「ほんとだ。なんだこれ」

三奈 「それ、カビ」

和也 「うっそ」

三奈 「テレビの、覚えてる？」

和也 「えっと、ナマケモノが苔生えてて」

三奈 「和也なんて言ってたっけ」

和也 「ど、動物として終わってるなって」

三奈 「動いているほうがいいよね？」

和也 「はい」

三奈 「明日、粗大ごみ業者に電話して、これ捨てて来てね。ひとりで」

和也 「新しいソファあって」

三奈 「うちのナマケモノが仕事始めたら考える」

和也、うなだれる。

終わり